

「現代」という時代を、 「歴史」として考える。

立川市の市史編さん事業は全部で6つの部会に分かれて作業を進めています。そのうち、人々の生活などを調べている民俗・地誌部会を除くと、時代ごとに区切られた5つの部会があります。古い時代から順に、先史、古代・中世、近世、近代、現代と分かれており、もっとも新しい時代を担当する部会が「現代部会」という名称になっています。

では、「現代」とはいつの時代をさすのでしょうか。「現代」という言葉は、「いまの時代」という意味です。時が流れて「いま」が変われば、「いまの時代」がさすものも変わっていきます。そのため、「いつからいつまでが現代」とはっきりと決めることは難しく、これを「歴史」として考える場合はなおさらです。たとえば前回の『立川市史』が刊行された1960年代には、「現代」を歴史として見た「現代史」は昭和のはじめごろ、つまり第二次世界大戦よりも前を含んでいました。戦前に生まれた当時の人々にとっては、戦争も「いまの時代」の一部だったのです。

それから時が流れ、現在では「現代史」というと、第二次世界大戦後のことをさすことが多く、立川の市史編さん事業でもこの区分を採用しています。「いま」の社会は憲法をはじめ、戦後の改革の影響がとても大きいからです。しかも立川の場合、日本陸軍の飛行場が占領を経て米軍の基地になったことも、「いま」につながる変化の大きな要因となりました。

時につれ変わる「いまの時代」に共通していることは、その時代の人々が生きてきた時代である、ということです。そうした「いま」を歴史として捉え直すための資料は、土の下に眠っている遺物や、代々受け継がれてきた古文書のような、いかにも「歴史」という言葉から連想されるものばかりではありません。現代部会が向き合っているものは、歴史は歴史でも「いまの時代」の歴史なのですから、私たちの「いま」の生活と地続きの資料が、「いま」を分析するために重要な意味をもってくるのです。

(写真：平成11年（1999）撮影)

